

## 相原正雄さん『読んで楽しむ“働くこと”』について

相原正雄氏

「日から鱗」の労働漫談とはこういうものではないか。2015年度の労働ペンクラブ賞を受賞した相原さんの「アフター5」（1月21日開催、24名参加）は著書のタイトルどおり、楽しく、ためになる内容だった。



詳細は是非、受賞本を読んで欲しいのだが、「西洋人は直線的に考えるが、日本人はスパイラルで考える」と前置きして、日欧米の労働観や労働にかかわる思想や文化の違いを、その豊かな経歴から具体的に紹介した。

労働を苦役ととらえ休息日を何より大切にする西欧人。労働をお勤めと考える日本人。日本の年功序列賃金を「同一労働・同一賃金が守られていない」、とOECDの労働組合諮問委員会で反撃された経験談。また、「雇」という漢字は籠に入れられた鳥を表すなど、漢字の意味にも蘊蓄を傾けた。

ILOに長年携わった人らしく、「労働は商品でない」ことを確認した「フィラデルフィア宣言」や日本が戦後、再加盟する際に、聖書の中の「放蕩息子」扱いされたことにも触れながら、条約締結の大切さを強調する。今から30年前に採択されたアスベストの安全にかかわる条約に日本が批准したのは遅かったが、条約に触発されるかたちで、問題が顕在化したと見る。

労働基準法の36協定が青天井の労働時間生むと批判。ILO第1号を批准すべきだという。

多彩な話を短いスペースではまとめきれないが、改めて労働というものを多角的に考える機会が与えられたと思う。(松田宣子)